

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 29 日現在

機関番号：32412

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2011～2015

課題番号：23520588

研究課題名(和文) 英語語序変化の韻律・意味論的研究

研究課題名(英文) A Prosodic and Semantic Study of the Changes in Word Order in the English Language

研究代表者

小林 茂之 (KOBAYASHI, Shigeyuki)

聖学院大学・人文学部・准教授

研究者番号：00364836

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：当研究は、古英語・中英語における語序変化の変化の要因として韻律論・意味論的な諸相を探索することを目標に、古英語期のアルフレッド・サークルによる韻文・散文、後期古英語期のアルフリッチによる散文、初期中英語期の『ピータバラ年代記』の散文、頭韻による韻文について、テキストを調査し、分析を行った。古英語韻文で頻出する V1 語序は散文においては意味論的な要因による語序であり、韻文における韻律と一致すると分析された。中英語の頭韻韻文では衰退が散文でも消滅した原因となった。また、V3 語序は意味的な要因によるものであるが、後期古英語では優勢であった V2 語序を SV(0) 語序に変化させたと分析される。

研究成果の概要(英文)：This study explores prosodic and semantic factors as the causes of changes in word order in Old English (OE) and Middle English (ME) by investigating and analysing Alfred's Circle's literature of verse and prose, Aelfric's prose in late OE, and the prose part of the Peterborough Chronicle in early ME.

The V1 word order in OE prose, which often occurs in OE verse, is analysed in order to relate it to a semantic factor, which corresponds to a prosodic one. This study clarifies that the extinction of this word order was caused by the decline of V1 in ME verse and the V3 word order, which was related to a semantic factor, changed the predominant V2 word order Aelfric's prose in late OE to the SV(0) word order.

研究分野：英語歴史言語学

キーワード：古英語 中英語 語順 統語論 韻律論 情報構造

1. 研究開始当初の背景

(1) 原理とパラメータ理論に基づく生成文法の研究が、英語の歴史的研究に適用されて、語序の変化が統語構造の変化として分析されている。この間に、原理とパラメータ理論 (P&P)、その発展上のミニマリスト理論に基づく Fischer et al. (2000)、Roberts (2007)、などの研究によって、統語論の立場からの研究の基本的枠組みが確立されてきた。

(2) 他方、語序を統語構造ではなく、LF (論理形式) や PF (音声形式) において決定されるという分析も提案されており、統語構造とのインターフェースが議論されるようになってきている。Seoane (2006) は、情報構造によって語序の変化を分析する試みである。当研究の開始直前に出版された Speyer (2010) は、古英語の主文で定形動詞が文末に置かれる現象について、韻律論的に分析する試みである。

(3) 以上の研究開始当初の背景をまとめると、古英語から初期中英語にかけての語序の研究が統語論の枠組みで進展している一方で、統語論と韻律論、意味論とのインターフェースを前提とする立場の研究が新たに展開されてきていた。

<引用文献>

- Fischer, O., A. van Kemenade, W. Koopman, and W. van der Wurff (2000). *The Syntax of Early English*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Roberts, I. (2007). *Diachronic Syntax*. Oxford University Press.
- Seoane, E. (2006). Information Structure and Word Order Change: The Passive as an Information-rearranging Strategy in the History of English. In Kemenade, A. van and B. Los (eds.). (2006), *The Handbook of the History of English*, 360-91.
- Speyer, A. (2010). *Topicalization and Stress Clash Avoidance in the History of English*. Berlin/New York.

2. 研究の目的

(1) 統語論と韻律論、意味論とのインターフェースを前提とする先行研究を受けて、統語論的な研究成果の上に、これらの語用論的な要因が古英語から初期中英語にかけての語序の変化にどの程度関わっているかを探索することで、語序変化のダイナミクスにアプローチする。

(2) 古英語から初期中英語にかけての語序の研究は、ミニマリスト理論による統語構造の分析、動詞移動に関する P&P 理論が精緻化によって、進展している。その研究成果を韻

律論や意味論の観点から見直す。

(3) 古英語・中英語の文献は、成立時期も地域も多様である。近代英語に連続する英語の変化を語序の変化の観点から、俯瞰することによって、文献を英語の連続性の上に定位させることを試みる。

(4) 言語変化の理論と文献的研究との調和のとれた歴史言語学的な英語語序の変化の研究の進展をめざす。

3. 研究の方法

(1) 中期古英語から後期古英語の文献資料のテキストを調査して、伝統的な文献学的な研究に配慮しながら、統語論に基づく理論研究と韻律論や意味論による語用論的な研究の観点から分析する。

(2) 先行研究による調査結果と照合し、幅広い語用論的観点から再解釈される可能性について検討する。

(3) 特定の変化が著しく起きたとみなさせる時期の文献資料を文脈上で詳細に分析する。

4. 研究成果

(1) 古英語・中英語の語序は、V2 を標準的な語順としながら、V1、V3、動詞文末 Verb-Final の語順が少なからず存在する。

その中で、『古英語版ボエティウス』(the Old English Versions of Boethius) における V1 に着目し、それが韻文に頻出することから、そこに強勢が置かれないことが韻律的な条件として課せられていて、それが意味解釈の上から主題であってフォーカスではないことと一致していることを明らかにした。

(2) 後期古英語の標準的な語序は V2 であるが、古英語は厳密な V2 言語ではないことはよく知られている。特に主語が代名詞形である場合に、動詞と代名詞形との語序の倒置が起こらずに、V3 語序となる。

古英語最後期とそれに続く中英語初期に当たる『ピータバラ年代記』(the Peterborough Chronicle) の最初の写字生による 'the First Continuation' と次世代に当たる別の写字生による 'the Final Continuation' を比較すると、後者において、代名詞形以外の完全な主語名詞が動詞に先行する V3 語序が出現する。こうした V3 語序の用法の拡張は、意味的要素の語序に及ぼす影響が中英語初期までに著しく減少したと解釈できる。

(3) 中英語初期の『ヴェリチェリ説教集』の V1 用法は、9 世紀後半の『古英語版ボエティウス』の新しい段落の始まりを示す機能を持

つ点で、共通している。このような V1 語序は、情報構造に基づく語順であると解釈できる。このような用法はその後、中英語期に衰退した。

その原因は、古英語の韻文の V1 語序が頻出するために、散文の V1 語序も現れやすかったと考えることができる。V1 語序の支えとなった韻文は韻律の規則に基づいているために、強固であったが、頭韻韻文が衰退した中英語期では散文の V1 語序は韻文の V1 の支えを失ったためであると推定される。

(4) 古英語の V1 語序は、韻文における頭韻のために後半の半行で現れやすい。これは散文における V1 語序は韻文に支えられていた。他方、中英語の頭韻による韻文『ガーウェン卿と緑の騎士』では、後半行で V1 語序が現れない。

中英語では、韻文においても、V1 が用いられなかったことは、頭韻韻文の韻律に関する規則が形骸化したために、韻律的条件に基づく散文の語順への影響が中英語期に消滅していったことの原因であるという分析が検証された。

(5) アルフリッチ (Aelfric) による『古英語版七書』(the *Old English Heptateuch*) の写本には、標準テキストである大英図書館版 (MS. British Library, Cotton Claudius B. IV) の他に、ケンブリッジ大学図書館蔵の写本 (MS. Cambridge University Library, li, 1. 33) がある。前者は、後期古英語期の 11C の写本であり、後者は初期中英語期の 12C の写本である。

両者の相違する部分を比較すると、前者の V2 および V3 語序が後者では SV 語序に変化したことが明らかになった。このことは、中英語初期までに散文における V2 および V3 語序の衰退は、英語語序の SV(0) 語序への固定化が進行したと解釈される。

(6) アルフリッチ (Aelfric) の『説教集』(Aelfric's *Homilies*) は古英語の最後期 (AD 992-1002) に製作されたものである。『説教集』では、重い名詞の主語と動詞との語序の倒置が起きる V2 語序が優勢である。また、軽い名詞である代名詞形主語と動詞との語序の倒置は起きにくいだが、これは古英語の特有の V3 語序であって、意味的にはフォーカスを受けにくい要素であって、統語的には、V2 語序の変異形として分析されるものである。

『説教集』と比較すると、『諸聖人の生涯』(the *Lives of Saints*) は、『説教集』と比較して、重い主語名詞であっても、動詞との転倒は特に優勢ではないことが、調査の結果、明らかになった。つまり、V2 語序は、古英語最後期において次第に衰退していく傾向にあった。続く中英語初期においては、SV(0) 語序に取って代わられる変化になったと仮

定される。

(7) 以上の研究成果を総括すると、V3 語序は韻律的な要因と解釈されるが、それはフォーカスを受けにくいという意味的要因にも支えられて、V2 語序の優勢を衰退させたという結論が得られる。また、V1 語序も意味論と連携が可能な韻律的な要因によると解釈されるが、それは V2 が厳密な語序として文法化されるのを阻止する上で、V3 語序と共に、英語語序が SV(0) 語序を発達させていく原因になったという仮説を立てることができ、統語的な語序の固定化に意味論・韻律論とのインターフェースが必要であるという当初の見通しが正しいことが明らかになった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 8 件)

Shigeyuki Kobayashi. On Verb-Second Phenomenon in *Ælfric's Lives of Saints*. 『聖学院大学論叢』24-1, 2011, pp.43-58.

Shigeyuki Kobayashi. Linguistic Comparison between Prose and Poetry in the Old English Version of Boethius' *De Consolatione Philosophiae*: A preliminary Survey. 『聖学院大学論叢』24-2, 2012, pp.165-181.

Shigeyuki Kobayashi. On Verb-Initial Constructions in Old English with Special Reference to Metrics. 『聖学院大学論叢』25-1, 2012, pp.143-157.

Shigeyuki Kobayashi. A Change in V3 Word Order in the *Peterborough Chronicle*. 『聖学院大学論叢』27-1, 2014, pp.131-154)

小林茂之. 「古英語の語順と空主語構文」. 『聖学院大学研究所紀要』No.58, 2014, pp.27-47.

Shigeyuki Kobayashi. Verb-Initial Word Order and Its Influence on Prose in Old English. 『聖学院大学論叢』27-2, 2015, pp.181-195.

Shigeyuki Kobayashi. Verb-Initial Word Order in Alliterative Verse in Middle English. 『聖学院大学論叢』28-1, 2015, pp.181-195

Shigeyuki Kobayashi. On Verb-Second Word Order Change in Early Middle English. 『聖学院大学論叢』28-2, 2016, pp.1-14.

[学会発表](計 2 件)

小林茂之. 「ケンブリッジ大学における統語研究 英語の史的研究に対する通時統語的アプローチ」. 2014 駒場英語史研究会, 2014.

小林茂之. 「12 世紀写本『ケンブリッジ大

学図書館蔵古英語版旧約聖書(七書)』における VS 語順から SV 語順への変化について」. 日本中世英語英文学会第 31 回全国大会口頭発表, 2015

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小林茂之(KOBAYASHI Shigeyuki)

聖学院大学・人文学部

准教授

研究者番号：00364836

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：